

# 藤井懶齋年譜稿（一）

——出生から正保二年まで

## 勝又基\*

藤井懶齋。儒医、儒者。姓は藤井（藤・滕とも）。氏は真辺（真鍋とも）。名は臧・玄逸。字は季廉。号は伊蒿子・仲庵・懶齋・よもぎが杣人。元和三年（一六一七）生、宝永六年（一七〇九）七月十二日没、九十三歳。

長寿に恵まれた彼の人生は、延宝二年（一六七四）、五十八歳の時点を節目に前半生と後半生とに分ける事ができる。

前半生の彼は、久留米藩で藩医として二十年以上を勤めた。当地では医学のみならず、文事においても頼みにされていたようである。五十八歳で致仕を願い出たのは、それほど早いものとも言い難く、少なくとも表向きには仕事をまっとうしての引退と評して良いであろう。

懶齋の儒者・文学者としての本格的な人生は、この時からようやく始まる。生地京都へ戻った懶齋は、延宝六年（一六七八）一月、六十二歳にして初めての著書『蔵笥百首』を刊行した。それ以後、九十三歳で没

するまで幸い三十余年にもわたる後半生を過ごし得た懶齋は、『本朝孝子伝』『仮名本朝孝子伝』『国朝諫諍録』『大和為善録』『徒然草摘議』『二礼童覧』といった著書を積極的に刊行して行くのである。

なかでも貞享二年（一六八五）十月刊『本朝孝子伝』は、江戸時代の孝子説話集の中でも、近世後期に幕府によって編まれた『官刻孝義録』と並ぶ重要な書物である。本稿を為す理由も、江戸時代前期の孝子説話集を考える上で、『本朝孝子伝』の作者に関する精査が欠かせないからである。この考証作業によって、藤井懶齋がいかなる文化的環境のもとに、いかなる経緯をへて『本朝孝子伝』を編み、刊行する事になったのかという事が明らかにできればと考えている。

さらに、教訓的な書物を積極的に執筆・刊行した彼のような儒者の伝記を明らかにする事で、近世前期における教訓のあり方を考える材料となる事を期待している。

### 【近世の藤井懶齋伝】

近世の懶齋伝として資料的に重要であるのは、墓碑銘と武富廉斎『月下記』『藤井懶齋』の章である。年譜に先立ち、それぞれについて紹介翻刻しておく。

#### 〈一〉墓碑銘

墓石は現在も京都市右京区鳴滝の西寿寺（浄土宗）に存する。表面には「伊蒿子滕翁之墓」とあり、背面に誌文を刻している。その中で「自為之銘是也」と言うように自ら撰じたものであり、信憑性という点で第一に挙げるべき資料である。摩滅もあって判読は困難だが、寺田貞次『京都名家墳墓録』（大正十一年十月 山本文華堂）に翻刻が備わる。また関田駒吉「藤井懶齋の没年」（『伝記』六の九十（昭和十四年）所収）

は谷秦山『秦山日抄』から近世前期の和学者・秦山が懶斎墓碑を訪れた際のメモを掲載していて読解の参考になる。これらを参考にしながら、自らの目でも確認して左の通りに試読した。

藤姓、真辺氏。臧名、季廉字。自号伊蒿子。京兆人也。諸世而□林□□之與□魚伍其所以隱、而処約之故何耶。所謂計窮力屈。才短不能營画者、是也。読書而所庶幾又何耶。所謂、不過苟免顯然。悔尤者是也。以是俟命。命將尽、因廼穿一窳於考妣玄廬之側、自為之銘是也。直雒之乾隅、鳴瀧山中、呼為泉谷、水土最淨。銘曰、山蒼且聳、泉□其湧、喜吾首丘、永奉先壠。

## ＜二＞武富廉斎『月下記』卷三「藤井懶斎」(抄)

編者・武富廉斎については寛文十二年「竹富廉斎との交流」の項で改めて述べるが、佐賀藩で儒学に志した人物で、左の引用⑤によれば、久留米藩医時代の懶斎を訪れて、学問について語る事もあったらしい。左に引用する『月下記』は、見聞きした善人の伝記にみずからの所見と考証等を加えたものである。引用は佐賀県立図書館鍋島文庫本を用いた。

### 藤井懶斎

①藤井懶斎、名は膝臧。伊蒿子と号す。洛陽の素生なり。壮年の比より出て、鎮西筑の後州久留米の城主に医官を以て事へ、真辺仲庵と云。儒を兼学びて、其德行あり。父は「栖馴し都を棄て遠く他方へ往の思ひなし」とて、京に居れり。仲庵定省の勤<sup>ムナシ</sup>くし、遠国に在るは、父の志を養ふの事なればなり。

②然るに父病牀に伏て、程なく終り、訃告<sup>ツゴ</sup>を聞て、哭哀み、聞喪の勤礼に踰<sup>ユ</sup>たり。やがて主に三年の暇を請て登り、京北山鳴滝に葬りし墳墓近くに臨て、哭哀み、其墓所に詣で拝し、位に就て哭し、万に

初喪の如くし、行歩徒跣にし、服を易て藤衣を着、塚の上に廬居<sup>イエイ</sup>して、苦に寝<sup>イネ</sup>、塊<sup>ツケ</sup>を枕とし、帯をも脱ぎ、杖つきて起臥し、朝に一溢<sup>イッ</sup>米<sup>ベイ</sup>手の裏に、夕べに一溢米を粥にして啜<sup>ス</sup>る事三月し、其後は鹿<sup>アラ</sup>き飯を食し、水をのみ、一めぐりの期年に至り、小祥の祭し、初て野菜、木の実を食ひ、喪に居る中はさびしく打過し、哀至れば哭哀み、親を思て忘れず。人來ても言ざれば答へず、浴<sup>ユ</sup>み沐<sup>カミ</sup>ふ事も虞<sup>ユ</sup>耐練祥の祭の時のごとし。三年めぐり、大祥の祭し、大祥の後、月を中て禪の祭し畢て、酒を飲、魚肉を食ひ、万づ常に還りしとなり。喪<sup>ラエ</sup>闋て筑紫久留城に帰りて事へ、其職務怠らず、歳月久し。

③仲庵思ひ出しは、「古人云る事有、『時の宰相と成て人を済<sup>スクハ</sup>ずんば、名医となりて人を救む』と云。医道の本志なりといへども、我術、我ながらも名医とは信ぜず。況や医は小道なり。しかじ、暇を請て致仕し、隱逸の身となり、聖人の道を楽しみて、独其身を善せん」と。主に暇を請へるに、許されし故、洛に登りて姓名を更め、老<sup>チ</sup>の墓近くに林居せり。

④又おもへらく、「野にすみ、山に在にも、時食を費すは遊民なり。陋巷に在る身といへども、世をも人をも思ふ事無むばあらじ。小補にも有んや」と、『本朝孝子伝』『本朝諫諍録』『二礼童覽』『為善録』、此外『蔵司百首』『徒然草摘義』等の書、著述す。これ皆世に行る。

⑤余も筑州は近隣の国ゆへ、其名を聞て訪寄<sup>トヨヨリ</sup>、折節は經義を正し、持敬究理の事、葬祭の礼をも問<sup>トヒ</sup>商量<sup>リョウリョウ</sup>り侍る親みにより、余、都に登りし時は、彼の林居近くに旅館し侍るに、懶斎年七十なりしが、鹿食して肉を食ず、酒を飲れず、居喪似たり。

⑥余問しは、『君子の耆老は徒食せず』と云るに、魚肉食せず、酒を

も飲れず。親戚の服忌有けん。縦然<sup>グロイ</sup>服忌有とも、五十以上の身は心とせず。況や七十にしては、親の喪といへども、哀麻<sup>サイマ</sup>のみ身に在ばかりにて、他は平日に異らざる事、先王の礼制なる事、先生のしるゝ事なるに」と言るに、懶齋の言るは、「吾は極めて不孝の者なり。遂に母をしらず。母吾を生て死せるとなり。鳥さへに反哺<sup>ハンボ</sup>の報ひ有。人として鳥にだもしかざるべけんや。殊更吾が為に死せる親なれば、其報恩をおもはずば、天罰も逃るべからず。せめて追て居喪に似たる勤め有たくおもひ、字を識りて後は、いよくなさまき思ひ、同志に商量る事しばしといへども、同志皆いへるは、『古礼にも見へず、聞し事もあらざるに、いかゞや有む』と云るゆへ、強ても勤めがたく、空しく過し侍る。近き比『三国史』読見しに、魏書の中に李追<sup>リツイ</sup>と言者の親、李敏<sup>リジン</sup>、害を避て家屬を將て海に入しに、いか成故にや、子の李追は遺りて有しが、塞を出て李敏を求め、二十年を越て娶らず。州里の徐邈<sup>キョウガク</sup>これを責て曰、『不孝莫<sup>シ</sup>大<sup>ニ</sup>于<sup>ハ</sup>無<sup>キ</sup>後<sup>ヲ</sup>何<sup>ニ</sup>可<sup>シ</sup>終<sup>ニ</sup>身<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>娶<sup>ラ</sup>乎<sup>ヲ</sup>』と云。是故に李追<sup>リツイ</sup>乃<sup>ハ</sup>娶<sup>テ</sup>て、子の胤<sup>イン</sup>を生み、妻は遣り去りて、常に居喪の礼のごとく、不<sup>レ</sup>勝<sup>テ</sup>憂<sup>ニ</sup>有<sup>テ</sup>て、程なく卒せし故、胤生て父母を知らず。識事有に及びて、蔬食<sup>ソシキ</sup>して哀戚<sup>アイセキ</sup>、亦三年の喪のごとくすと言事有を見侍る日より、予も蔬食などして見侍るなり」と云り。其志ゆへ恙なく勤め関られしなり。

⑦此外、嘉言善行も多しとなれども、余は久しく親炙せざれば、委くはしらず。知ざる事おろかに云むは、云ぬぞまさるなるべし。且よく知れる君子の筆に漏じ。たとへ君子の筆なくとも、其德行の篤実なるは、両親の喪を執れる、遍く人の知て隠<sup>カク</sup>なし。其知識のはたらしは、著述の書四方に散り、又詩歌をも嗜れて拙からざる事、人の能知る所。知行兼備し君子にて、寿九十有三にて棺を蓋へり。本朝

古今出来し書、幾千万巻の数もしられずといへども、『孝子伝』『諫諍録』の二書は、多くの下には有まじと云人多し。さも有ならし。(下略)

主に参考とするのは右の二資料であるが、この他の近世における懶齋伝についても触れておきたい。従来最もよく知られる藤井懶齋伝は『先哲叢談』(文化十三年(一八一六)刊)巻之四に載るそれであろう。しかし源了圓・前田勉訳注『先哲叢談』(東洋文庫五百七十四 平成六年二月 平凡社)や拙稿「先哲叢談聚議 連載その四 藤井懶齋」(「雅俗」第四号(平成九年一月 雅俗の会))が明らかにした所によって、ほぼすべての記述に関して、元の資料に当たる事が可能である。よって本稿ではあまり利用しない。

また『事実文編』巻二十五には「懶齋藤井先生伝」が収められる。しかし安中侯板倉勝明(文化六年(一八〇九)生、安政四年(一八五七)没、四十九歳)の手に成るこの伝記は『先哲叢談』よりさらに遅れて成ったものである。よってこれも本稿ではほぼ登場機会が無い。

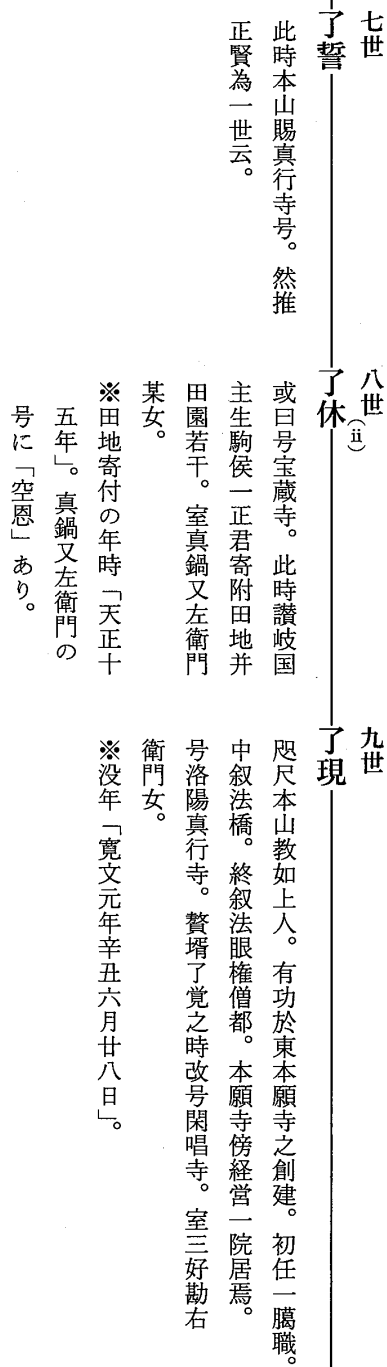
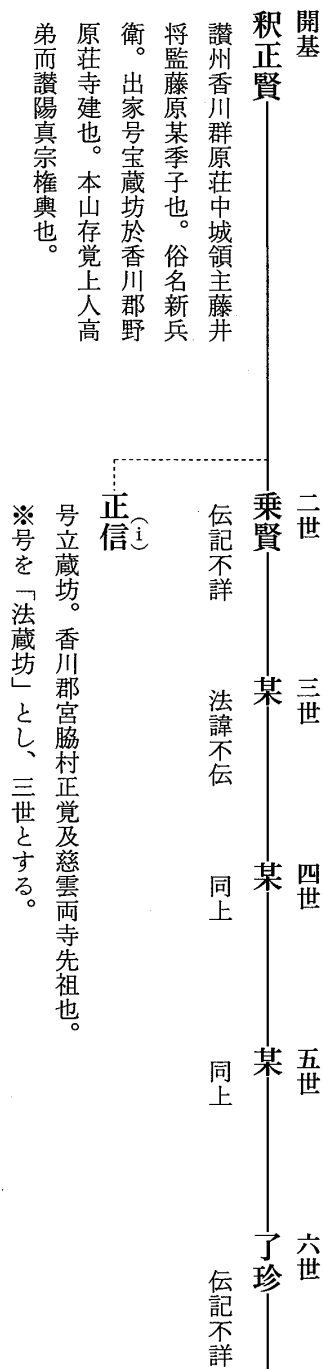
以下に懶齋の事跡を年譜形式でたどって行く。

懶齋の事項は○、未確定事項は△、関連事項は□を以て示した。

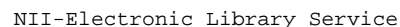
また全ての古典資料の引用は、句読点、濁点、ルビなどを適宜補った箇所がある。

〈図二〉「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」(抄)

- 一、※印以下は閑唱寺資料より抜き出したもの。  
一、底本は『竹原志料』竹原書院図書館本。



(iii) 「閑唱寺略系譜」では、第三子と第四子とが入れ替わっている。



## 元和三年（一六一七）丁巳 一歳

○この年、僧了現の子として京都に生まれる。母である三好勘左衛門娘、懶斎を産んで間もなく没する。

### 【生没年】

懶斎の生没年については、早く『京都名家墳墓録』が西寿寺過去帳に七月十二日没とある事を報告したが、没年や没年齢は明らかでなかった。これに対し、初めて没年を提示したのは関田駒吉「藤井懶斎の没年」（先述）である。関田稿は江戸時代前期の和学者・谷秦山が編んだ『秦山日抄』から秦山が懶斎の墓を訪ねている記事を紹介している。ここに「宝永六年己丑七月十二日没、享年九十有三」とある事に着目して、宝永六年七月十二日没、九十三歳説を唱えた。加えて船木真由「藤井懶斎の文学観」（『香椎潟』三十三 昭和六十二年九月 福岡女子大学国文学会）が武富康斎『月下記』に「寿九十三にて棺を蓋へり」とある事を指摘して関田説を補強した。これらは共に納得できるものであり、元和三年（一六一七）生、宝永六年（一七〇九）没、九十三歳という点に関しては動かないであろう。

### 【家系資料】

懶斎の家系に関する資料としてまず挙げるべきは、安芸国竹原地方の地誌『竹原志料』（写本七冊。所見本竹原書院図書館蔵）である。このうち「寺観」編の照蓮寺に関する箇所には「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」という記事が掲載されており、これが懶斎の家系を調査する上で第一の資料となる。該当系図については菅脩二郎・久保昭登編『安芸竹原照蓮寺』（平成十五年十月 照蓮寺）に翻刻が備わる。讃州高松の

松林山真行寺（真宗大谷派・高松市扇町）にも同系図の異本が存するが、これは照蓮寺蔵系図の写しで、若干の省略箇所がある。

安芸竹原の照蓮寺はもと曹洞宗仏通寺派で定林寺と称した。開基の時期などは明らかでないが、室町初期には小早川家の学問所とされるなど、当地の学問の中心としての役割を果たした。慶長八年（一六〇三）三月に僧浄喜を迎えて浄土真宗として再興した（先述『安芸竹原照蓮寺』による）。

懶斎の家系資料が一見地縁の見出しがたいこの安芸照蓮寺に存するのには理由がある。懶斎にゆかりの深い讃州高松真行寺の十四世了智が、寺を出てこの安芸照蓮寺に入り、八世恵応となったのである。「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」には「十四世了智」の項に「正徳二年十月為檀越退出寺、正徳五年八月芸州竹原照蓮寺入寺」とある。同系図は了智（恵応）の代で記述が終わっており、彼が編んだものと考えて差し支えない。

また、京都の閑唱寺（真宗大谷派・京都市下京区下珠数屋町）にも懶斎家系に関する資料が存する。後にも述べるが、閑唱寺は懶斎の父・了現が開いた寺である。『法名帖』所載の「当寺略系譜」と歴住の過去帳（以下『法名帖』所載過去帳と称す）。『法名帳』所載の「閑唱寺略系譜」「当時法名記」が重要である。

竹原照蓮寺資料と京都閑唱寺資料との記述内容には、字句が共通する点も多いが、大きな相違点が二点ある。第一点は懶斎の父・了現の前に大蔵坊往寿、信解庵円寿という二世を見る事。第二点は懶斎の兄弟関係に大きな違いが見える事である。

高松の真行寺の資料は、現在香川県歴史博物館に収められている。このうち系図が竹原照蓮寺に在ったものの写しである事は既に述べたが、

「雜記」(所蔵番号あ二の十四 仮綴じ写本一冊)は他寺の資料に見られない伝記情報を記しており有益である。

〈図一〉に「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」の懶斎に係する部分を翻刻する。加えて閑唱寺資料における異同を補記した。

### 【父・了現と懶斎の生地】

懶斎の生地は京都説、筑後説、讃岐説と定まらなかったが、懶斎墓碑や『月下記』といった信頼すべき資料が記すとおり、京都が正しい。

懶斎の父・了現は、もと高松真行寺の住職の子として生まれたが、若年にして京都へ登ったようである。高松真行寺蔵「雜記」には、「寺ハ舍弟ニユヅリ、京師ニ新ニ真行寺ト号シ、御奉公相勤候」とある。了現が上洛した時期については、藤井懶斎著「真鍋氏説」(『竹原志料』所載)に「余の先人は乃ち讃州の人にして真鍋祐重等の族なり。慶長の初へ洛人となり、真邊と称す。余は其の庶流なり」(原漢文)とあって、慶長のはじめ頃という事が判る。

了現の生年は、前出「雜記」に「寛文元年丑年六月二十八日往生、七十六」とある事を手がかりに考えると天正十四年(一五八六)生となる。すなわち上洛した慶長のはじめ頃は十代前半という事になる。

京都に移り住んでからの了現は〈図一〉の系図に見える所に明かである。書き下しておく。

本山教如上人に咫尺し、東本願寺之創建に功有り。初め一臈職に任じ、中に法橋に叙せられ、終に法眼権僧都に叙せらる。本願寺の傍に一院を経営して居す。洛陽真行寺と号す。贅聳了覚の時、改めて閑唱寺と号す(下略)

着目すべきは、了現が教如上人の側に仕え、東本願寺の創建に功があったという点であろう。

教如とは言うまでもなく真宗大谷派の始祖にあたる僧である。徳川家康の庇護を得て、慶長九年(一六〇四)に本願寺から別れて東本願寺を開いた。東本願寺が成った慶長九年(一六〇四)の時点で了現は十九歳。「功有り」とは言ってもその詳細は不明である。ともかく若年の了現の事跡を要約すれば、彼は讃岐の国高松真行寺の子として生まれたが、少年時に京都へ登り、教如に仕えて東本願寺の創建に関わったのである。「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」によれば、そのち了現は、洛陽真行寺なる寺を経営し、これはのちに閑唱寺と改称されたと言う。これが「家系資料」の項で挙げた閑唱寺である。以下本稿では、基本的に讃岐の真行寺を「高松真行寺」、京都の真行寺を「閑唱寺」と称して区別する。

### 【実母と継母】

父・了現と藤井懶斎との年齢差について計算しておく、懶斎は了現が三十二歳の時に生まれたという事になる。

懶斎の母親について「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」は「三好勘左衛門娘」としていたが、「雜記」には「室三好勘左衛門娘 後妻上田久兵衛娘 本山家老」と、後妻に関する記述も見える。

先妻についてはこれ以上詳しい資料を見出していない。但し後妻とされる上田久兵衛娘については、京都閑唱寺蔵「当寺略系譜」に「妻栄順上田久兵衛珍行之娘。從(二字不明)嫁当寺。上田家世々本願寺為家司」とあり、また同寺蔵「法名帖」所載過去帳にも「釈尼栄順 同(引用者注・寛文)二年壬寅七月十九日」とあって、その輪郭を知る事ができる。

懶斎は先妻と後妻のどちらの子であったのだろうか。この問題については、武富廉斎『月下記』に懶斎の言として「吾は極めて不孝の者なり。

遂に母をしらず。母吾を生て死せるとなり」と記しているのが参考になる。母が自分を産んですぐに没したというのである。後にも述べるように懶斎はその下にも弟妹がいたようであるし、後妻とされる栄順は、寛文二年（一六六二）没と、懶斎が四十六歳の時まで生きている。以上より、懶斎の母は先妻の三好勘左衛門娘であったと考えられる。

ただ先に見た「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」には、懶斎の姉の箇所に「或曰以下三子別腹」とあり、また第五子である八文字屋八右衛門の箇所にも改めて「或曰別腹」とある。これによれば、なお存疑とすべき点も残る事を断っておく。

#### 【懶斎の兄弟姉妹】

懶斎の兄弟関係は、〈図一〉の系図に記しておいた通り、「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」と閑唱寺藏資料とで異同が甚だしい。「讃州府真行寺先住世系 附外戚系図」では男（了清）、女（辻権右衛門室）、男（懶斎）、女（閑唱寺了学室）、男（八文字屋）の兄弟構成で懶斎は次男。いっぽう京都閑唱寺藏『法名帖』所収「当時略系譜」では男（了学）、男（八文字屋）、男（懶斎）、女（ハツ）の兄妹で、懶斎は三男。また同寺藏『法名帳』所収「閑唱寺略系譜」では同じく三男としながらも、兄弟構成が男（了学）、男（八文字屋）、女（ハツ）、男（懶斎）と異なっている。これに関しては確定する材料を持っていない。

寛永十九年（一六四二）壬午 二十六歳

△これ以前、京都で医学を岡本玄治に学ぶ。

#### 【医学の師・岡本玄治】

久留米藩に儒医として仕えた藤井懶斎の医学の師については、『筑後志』巻之四に「岡本玄治が門に遊び、医業を以て府君に勤仕す」、「石原家記」寛文八年の項に「真部仲庵老弟<sup>玄治</sup>」（以下引用は久留米市民図書館新有馬家文庫本『石原日記』〈四七〇五〉四七〇六）により、不審・不明の箇所は同館蔵別本〈MS21/イシ〉を参考にした）とする。医師として仕えた久留米藩の資料であるゆえ信憑性は高い。玄治を師であると明確に述べた懶斎自身の発言は今のところ見出していない。しかし懶斎の随筆『睡余録』第三百十八話には、寛永中に岡本玄治が子姪門人に語ったという言葉を録するなど、岡本家との関係を窺わせる記事が散見される。

岡本玄治は懶斎仕官の三年後にあたる正保二年（一六四五）四月二十日に没している。よって懶斎が学んだのは久留米藩に儒医として仕える前であると言って良いであろう。

□九月三十日、久留米藩初代藩主・有馬豊氏没、七十四歳。十一月五日、二代藩主忠頼（瓊林院）襲封。

△このころより、医学をもって久留米藩に仕え始める。

懶斎の著書『北筑雑纂』に寄せた中村易張の跋に、「甲寅（引用者注、延宝二年〈一六七四〉）の秋、佳恵を承けて京師に帰休す。初めて先生我邦に到始めてより、此に三十有三年」（原漢文。引用は久留米市民図書館蔵本〈新有馬文庫六〇六三〉による。以下同じ）とあるところから逆算した。久留米藩は二十一万石。前項で見たように久留米藩はこの年の十一月に二代藩主忠頼へと代替わりしている。



鶴久次郎「分限帳等に見る久留米藩医(稿)」(「久留米郷土研究会誌」三 昭和四十九年六月)がすでにまとめた所であるが、目にした所を新ためて並べておこう。

『分限帳 万治元年九月改』には「一 三百石 真邊仲庵」。同(蔵米)『寛文年中御家中分限帳』には「医師」の部に「一 三百石貳拾人扶持 真邊仲菴」。「寛文六年午年御家中分限帳」の「軍役無」の部に「一 高三百石貳拾人扶持 此米三十六石但壺ヶ年分 医師 真邊仲庵」とある。また『廃家系譜知行高目録』には「慈源院様御代／一 三百石<sup>二十人扶持</sup> 真部仲庵／御医師依頼御暇於京都藤井懶齋号」とある。

### 【久留米藩時代の資料】

『久留米市史』第二卷(昭和五十七年十一月 久留米市)第七章には、『筑後志』・『石原家記』・『米府年表』・『筑後將士軍談』・『久留米小史』は、筑後地方の五大文献といわれている」とある(一〇三三頁)。このうち藤井懶齋伝にとって特に重要なのは、『石原家記』(『石原日記』とも)である。該書は久留米の商家・石原為平(天明八年(一七八八)没、七十二歳)が青年時代から読んだ旧記・書籍により、藩祖豊氏入封の元和七年(一六二一)から天明初年まで、約百六十年間の諸事に関し、年次を追って精細に筆録したものである(『久留米市史』)。この中には「哀詞」ほか、他には見られない懶齋の久留米藩医時代に関する貴重な記述が多く見られる。

くわえて近年、筆頭家老を勤めた有馬内蔵助の日誌の抜粋である『古代日記書抜』が『福岡県史』近世史料編 久留米藩初期(下)(平成九年五月 西日本文化協会)に翻刻され、新たな知見を得る事ができた。

### 【久留米藩医としての活動】

医師としての活動に関しては、『石原家記』寛文八年(一六八八)の

項に次のような記事が見える。久留米藩医時代の逸話としては従来知られていた唯一のものである。

一、真部仲庵老ハ病人ニ人参用時、仲庵老方より加遣被申、病家より人参加候得ば、望次第被致、人参を見被申候而用被申。扱又薬礼ニ金銀米銭ハ受納無之。余之品ニ而薬礼致す。

これに加えて『古代日記書抜』には、新たに寛文九年(一六八九)九月の記事として、「稻次左、真部仲菴療治候へ共、疲衰ニ而無心元、独立薬服用、八月十四日より長崎へ罷越、九月廿五日迄ハ、今ニ逗留被罷在候由」と、医療の記事が見える。

また同書寛文十年(一六七〇)十一月の記事には、次のように、懶齋が烏犀円のような製薬においても力を発揮していた事が分かる。

一、烏犀円、御家老中衆病人ためニ候間、前々より調合被仰付置候儀ニ付、今度も真部仲菴へ申付候処、二剂調合可申、薬種之内、飛弾国ニ在之槐膠能ニ付、先年も御所望ニ相成候由、今度も金森飛弾守殿へ被仰遣、槐膠二十目程御所望被差下候様

□寛永年間、懶齋の兄弟・八文字屋八右衛門、京都鳴滝西寿寺を再興する。

元禄十一年「西寿寺の再興」の項参照。

正保元年（一六四四）甲申 二十八歳

□この年、菊池耕斎（東匂）、儒医として久留米藩に仕え始めるか。

菊池耕斎（諱・東匂）は懶斎と同じく久留米藩初期の儒医である。耕斎はもと京都の人で、久留米藩に来る前には菅得庵・林羅山に儒を、野間玄琢に医を学んだと言う。『久留米人物誌』『有馬頼利（靈源院）』の項は「先代忠頼の時に招聘された菊池東匂が去ったあとに、山崎闇斎門下の真名部仲庵（のち、藤井懶斎と改む）を藩医、藩儒として三百石で招聘し、藩士子弟に学を授けさせた」と、懶斎が耕斎の後釜であったとしている。しかし実際は、懶斎の方が早く久留米藩に仕え始めたようである。

内閣文庫蔵『耕斎全集』（写本二十巻四冊。宝永三年十二月序）のうち巻之十一「紀行三編」序に「寛永十年癸酉 先生十有六歳初来江都。明年帰洛。十六年己卯二十二歳再来江都。其秋帰洛。正保元年甲申二十七歳往筑之久留米。慶安三年庚寅帰洛」とある。また同書第四冊末の「耕斎先生略伝」（宝永三年七月 小子武雅識）にも「始発正保元年甲申二十七歳、游事中書侍郎有馬君於筑後久留米。居七歳、顧念父母之養屢有帰歎」とある。すなわち正保元年（一六四四）から慶安三年（一六五〇）までの仕官であった。先述の通り懶斎の仕官が寛永十九年（一六四二）からである。つまり耕斎は懶斎より数年遅れて仕官し始め、懶斎より早く久留米を出たという事になる。

久留米における懶斎との交流も想定されるが、『耕斎全集』の中に懶斎の名は見出せなかった。

正保二年（一六四五）乙酉 二十九歳

□四月二十日、医学の師・岡本玄治没、五十九歳。

寛永十九年「医学の師・岡本玄治」の項参照。

○八月九日、京を発ち二度目の江戸行。二十四日の到着までを和文紀行『再往日記』に記す。

該書は国会図書館蔵写本の他に所在を知らない。後補の題簽に「東武再往日記」とあり、『国書総目録』等もその名で採るが、厳密には内題の「再往日記」を優先すべきであろう。

懶斎自跋の全文を挙げておく（原漢文）。

客有り、余に謂て曰く、「翁、嘗て東武に遊ぶ者、ただ十回のみならず。其の間、幾篇の紀行有りや。請ふ、悉く之を閲せよ」と。余曰く、「初・再の兩行、聊か記す所の者有り。一は則ち真字、一は則ち国字なり。今並に其の草を失ふ。宜しく吾子の為に之を尋ねべし」と。客曰く、「忘るる勿れ」と。後数月して再行紀草を故紙堆中に探し得たり。然れども昔時路上の乱蕪にして、文字太だ白ならず。他人之を読み、之を写すこと能はざる者有り。故に已むを獲ずして、躬自ら之を謄写す。即ち是、這一本なり。余、之を紀すの時、三十未滿。指を屈すれば茲に五紀。懐旧の涙、承睫在ることを得ず。嗚呼噫嘻。

宝永乙酉仲冬中澣 伊蒿子 歳八十九

自跋に記された「宝永乙酉」は宝永二年（一七〇五）であるが、その跋中に「余、之を紀すの時、三十未満。指を屈すれば茲に五紀」とある。つまり若年時に著した紀行文へ、後年になって付したのがこの跋文なのである。「五紀」の「紀」は十二年。おそらく概数であろうが、宝永二年に書いた序文が言う六十年前となれば、この正保二年（一六四五）、二十九歳の時の紀行文だったという事になる。

また同じ跋に、「翁、嘗て東武に遊ぶ者、ただ十回のみならず」とある。懶斎は晩年までに十度以上江戸を訪れており、一度目の江戸行きでは漢文の紀行を、二度目の江戸行では和文の紀行を草したという。

さてこの紀行文、八月九日深更に京都を発ち、東海道を上って二十四日に品川へ着くまでのものである。旅の理由については文中に「此秋しも又やむことをえて、秋の露の玉くしげ、ふたたび赴きゆく事に成ぬ」とある以外明らかでない。

まず問題となるのは久留米発ではなく京都発であるという点だろう。懶斎はこの歳すでに久留米藩に仕え始めている筈である。しかし右の記述だけでなく、文中に「定省をかゝむもこゝろぐるしく覚え侍れど」とも見える。「定省」が親に仕える意である事を考えるならば、この時期親と同居していたとさえ読める。この時期まだ京都に住んでいたと考えるべきだろうか。あるいは頻繁に久留米と京都とを行き来していたと考えるべきだろうか。

また文中には、自らの和歌（含長歌）・漢詩も少なからず掲載されている。所々で羅浮子（林羅山）、木下長嘯子、烏丸光広、藤原惺窩、六々山人（石川丈山）といった近世初期文人の名と作品とを引用している事は、この時期における近世文人受容として興味深く感じる。

（未完）